

貨幣史研究会（東日本部会）第6回
平成13年2月28日（水）13:30～17:00

<出席者>

座長：鈴木公雄・慶應義塾大学教授
報告：櫻木晋一・下関市立大学教授
高橋学而・九州大学非常勤講師

その他の参加者（五十音順）：

今村啓爾・東京大学教授
岩橋 勝・松山大学教授
大久保隆・一橋大学教授
田代和生・慶應義塾大学教授
田中浩司・函館大学専任講師
中島圭一・慶應義塾大学助教授
西川裕一・日本銀行金融研究所
藤井典子・日本銀行金融研究所企画役

研究報告ならびに討議の模様（文中敬称略）

(1) 櫻木晋一「中国における出土貨幣調査報告」（別添1参照）〈報告内容略〉

(2) 高橋学而「中国における銀幣についての諸研究とその課題」（別添2参照）

（銀貨の始源）

中国でいつから銀貨が用いられたのかという問題について、明・清代の学者が諸説を展開し、その多くは宋代以降であるとの見方が多かった。しかしながら、約20年前に河南省扶溝県で極めて注目すべき発掘がなされ、多くの研究者の注意をひく遺物が確認されている。扶溝県の扶溝古城から銀の布銭が出土し、この資料を調査した研究者は、春秋時代（BC770～BC403年）に既に銀貨の鑄造が行われていたことを指摘したのである。

これに次いで目下のところ時期的に古いものには内藤虎次郎氏が所蔵していた銀貨（現在、貨幣博物館所蔵）が挙げられる。これには、「中元二年」と紀年名が刻まれており、後漢の光武帝時代（25～57年）のものとして推定されるが、一部で「刻まれた年号は偽刻である」との見解もあり、真偽のほどは明らかにされていない。

その後、唐代（618～907年）に至るまでの約600年間に使用されたとみられる銀貨は今のところ見つかっておらず、この間の銀貨の使用状況は不明である。

（銀錠の系譜）

次に、唐代以降の中国における銀幣の使用状況について、中国の貨幣史研究者の理解に則りみていくこととしたい。

唐代には、長方形や東腰形（資料ペーパー2頁中央参照）をした銀錠や不規則な円形の銀餅が鑄造され、納税もしくは進奉（献上）に用いられたと考えられている。

続く宋代（960～1279年）には、全国的に多くの市が出現し、水路や陸路の発達によって大規模な商業網が形成されたことを背景に、工業や農業の生産力の高い地区を中心に銀が貨幣に転換する現象がみられはじめたという。なおこの頃は、銀を砕いて用いる碎銀もみられた。

また、南宋が栄えていた時代、中国の東北地域には、女真族により樹立された金朝が成立し（1115～1234年）、銅銭や交鈔（紙幣）が貨幣として用いられた。さらに中国最初の法定計数銀貨であると考えられる「承安寶貨」が鑄造・発行され、銭荒（銭不足）の緩和に大きな寄与をなしたといわれている。

元代（1279～1368年）に入ると、交鈔の流通が推進されると同時に、銭貨（銅銭）が鑄造された。また、著名な「揚州元宝」など多くの銀錠はさらに広く用いられたとみられる。元国政府は、交鈔の使用を中心とする貨幣制度の樹立を目指したが、銅銭や金銀の流通を完全に抑えることはできず、元代末期には交鈔の濫発によるインフレーションが発生して、交鈔はその信用を失った。これにより、その後の銀使用の趨勢が決定づけられることとなった。

明代（1368～1662年）には、商品経済の発達に加え、各地で銀の採掘が盛んとなり、さらには日本や東南アジア各国との貿易活発化を背景として、大量の銀が国内に流入したため、銀の大量使用が行われるようになった。また、明代後半よりフィリピンなどからスペイン銀貨が流入してくると、それらは銀錠に鑄直されることなく、そのままの形で流通するようになり、次第に中国内でも地方政府が円形銀貨を鑄造するようになった。1844年に吉林機器官局が鑄造した円形銀貨「廠平一兩」・「廠平半兩」はその代表であり、1903年発行の清国政府制定銀貨「光緒元宝」の端緒となった。

（「承安寶貨」について）

承安寶貨は、金朝によって1197年に発行された貨幣であり、「中国最初の法定計数銀貨」であると考えられている。実物資料は、1981年に初めて存在が確認され、東腰形をしていることがわかった。発行当時の記録に「遂改鑄銀、各承安寶貨、一兩至十兩、分五等」と書かれており、発見された「壹兩半」の貨幣のほかに、4つの異なる重量額面を持った貨幣が存在する可能性が示されている。

（西方銀貨の流入とその流通）

唐代前後に、ササン朝ペルシア銀貨が中国内に流入してきたとみられている。吐魯番（トルファン）地区では、6世紀末から7世紀にかけて税の徴収など多くの面でササン朝ペルシア銀貨が使用されたとの文献記録が残っている。同表のNo.16には、当時の代

表的ササン朝銀貨であったコスロー2世銀貨と、その貨幣の様式を模した貨幣が同一の場所から大量に出土した事例がみられる。これは、当時、イスラム世界において、正統カリフ時代（632～661年）が幕を開け、新しい銀貨が制定されたものの、この銀貨が交易相手国である中国で受け入れられなかったため、仕方なく信用力の高い昔のササン朝銀貨（コスロー2世銀貨）を模した銀貨を鑄造して使用せざるを得なかった状況を表しているものと考えられる。

また、元代にはアラビア銀貨が流入した。資料ペーパー3頁右の表にある、出土銀貨の状況をも、当時多くのアラビア銀貨が中国内で流通していたことがわかる。

<質疑応答>

（鈴木）中国の出土銀貨に円形方孔の形状を持ったものはない、という認識で良いか。

（高橋）厭勝銭や慶祝銭と一般に理解されている事例を除けば、出土資料としては見つからない。もっとも、文献記録によれば、前漢代（BC202～AD8年）に銀とすずを混合した円形方孔銭が存在したらしい。また、現在の内蒙古地区周辺に10～11世紀頃に存在した遼では、銀の契丹銭が作られている。

（鈴木）承安寶貨には、額面の異なる5種類が存在したとのことであるが、出土した承安寶貨に記された「壹両半」という重量銘文はどのように捉えたら良いのか。

（高橋）まだ発見されていない4種類の承安寶貨の銘文や重量をみてみない限り、何ともいえない。

（高橋）実物をみていないので何ともいえない。

（鈴木）出土した銀の布銭と関連して、布銭は春秋時代の中頃に発行され、その後は全く発行されていないという理解で良いか。また、当時、黄河以北では刀銭が発行されていたと認識しているが間違いないか。

（高橋）出土例をみる限り、そのようである。

（田代）中国で、日本の銀貨が出土する例はみられないか。

朝鮮の文献資料をみると、17世紀中に日本から流出した大量の慶長丁銀や元禄丁銀は、そのままの形状を保ったまま、朝鮮を経由して中国国内に持ち込まれたと書かれているが、その後、丁銀がどのように処理されたのかはわからない。丁銀の行方を知る手がかりとなるものが、中国の明・清代の遺跡から出てきていないか。

—— 朝鮮の史料には、「会同館」と呼ばれる北京の客館において、「八星銀」と呼ばれる日本の丁銀が、中国産の絹や生糸と取引された様子が記されている。

また、元禄の改鑄後、日本の丁銀が改鑄のたびに改変されるため、朝鮮から「中国で信頼されている、丁銀の極印を変更しないでほしい」という要請が出されている。

（鈴木）資料ペーパー3頁の表1のNo.10に、ササン朝ペルシア銀貨が、貨泉や開元通宝といった中国銭貨と一緒に出土している例がみられるが、日本の丁銀がそのままの形で残

されていたとすれば、中国国内から出土してもおかしくないはずである。

(高橋) 管見の範囲内で、中国国内で、丁銀が出土した例はまだない。

ところで、大量に流入したとみられるササン朝ペルシア銀貨の中国国内における出土例が少ないことについて、『ケンブリッジ・イラン史』を表したウィリアム・ワトソンはこれらの銀貨の多くがおそらく中国国内で鑄潰され、銀錠に鑄直されたとの理解を示したことがあった。目下、その事例は確認されていないが、興味深い研究対象の一つであるといえよう。

(西川) 承安寶貨は「中国で最初の計数銀貨」であるとの見方もあるようであるが、そうであれば重量いかにかわらず、銭貨との交換レートは画一的に定まっていたのか。

(高橋) 承安寶貨 1 両につき銅銭 2 貫 (=2,000 枚) と交換する旨定められていた。もっとも承安寶貨は、後に別の金属を混ぜ純銀比率を下げたものが鑄造されて急速に信用を落とし、廃止されるに至っている。

(藤井) レジュメ 4 頁にある承安寶貨の重量を示した表をみると、「壹兩半」と銘文の書かれた銀貨の重量が 59~60 g 付近に集中しているが、実物資料には重量調整を図った工夫のあとはみられるか。

(高橋) 実物を見ていないのでわからない。

(田代) 重量が 60 g 付近に集中していることを踏まえると、当時の重量単位は 1 両=40 g であったと考えて良いのか。

(高橋) 当時の一般的な水準としては、1 両は 37~38 g であったとみられている。

(鈴木) 1 両の重さは、地方によってそれぞれ微妙に異なっていたと考えられる。

(岩橋) 承安寶貨に削り取られたような形跡があれば、それは計数銀貨として流通していた証しであるといえよう。

(鈴木) 計数銀貨として一定の価値を有していたとすれば、承安寶貨は、当時発行された紙幣の価値を保証する機能をも果たしていたかもしれない。こうした意味では、ぜひ承安寶貨の形状や銀純分比などについて詳しく知りたいところである。

ところで、現在、これらの承安寶貨の実物を見ることはできるのか。

(高橋) これらは現在、黒龍江省の文物関連の機関が所蔵しているとみられるが、熟覧の可否についてはわからない。

(岩橋) 資料ペーパー 2 頁の右上にみられる銀盞に関する説明がなかったが、これらは何を意味するのか。

(高橋) 報告時間の制約上、銀盞に関する説明を省略したが、これらは銀貨とともに出土したものであり、製作年代を特定できるため、伴出資料 (同時に出土した銀貨) の時代比定が可能となる。

(藤井) 前回の研究会で、銀貨は土の中で酸化し、黒色に変化してしまうとの報告があったが、中国における銀貨の出土状況はどうであったのか。

(高橋) 中国における貨幣の出土例をみると、窖藏 (あなぐら) の中から、木箱や筥に封

入された形で発見されたり、焼き固められた土の中から見つかることが多いようである。

(鈴木) 資料ペーパー2頁の中央付近に示されている聖福寺瑞応庵や興福寺で発見された銀挺は、果たしてどのような状態で出土したものなのか大変興味深い。

(田代) 聖福寺は、海外貿易に関係の深い寺であり、この寺の住職が中国や朝鮮への使節団の正使や副使として派遣されている。茶会を通じて、博多の文化サロンとして、商人や武士などの交流の場ともなっていた。

(岩橋) 興福寺からは、鎮壇具をはじめいろいろなものが出土したようである。

(鈴木) 興福寺出土の銀挺は、現在東京国立博物館に所蔵されていることを考えると、おそらくかなり古い時代に出土した資料であると推測され、唐代ないしそれ以前のものである可能性が高い。これを踏まえると、これらの中国銀貨が、わが国で鑄造された無文銀錢や和同開珎銀錢に何らかの影響を与えた可能性についても否定できない。

(岩橋) ウィグル地区で発見されたコスロー銀貨の様式を模した銀貨というのは、ウィグルで鑄造されたのか。

(高橋) 中国内ではなく、中国に近接した場所で鑄造されたとみられている。

(田中) 報告では、唐代の銀錠を「税銀」と「進奉に用いられた銀」の2つに分類していたが、銘文のみを根拠として分類するのは難しいのではないか。

(高橋) ご指摘のとおり、実際の使用状況について明確に分類できないことは承知している。当初は進奉に用いられたとしても、その後は銀の重量と品位に応じて市場取引された可能性もあるだろう。ただ、銘文をもとに、鑄造意図を明らかにし、それを区分したうえで形状を比較することは意味があると思われる。

(田中) 1970年に洛陽市で見つかった銀錠は、「楊国忠」という唐代の宰相(楊貴妃の親族)の名前が刻まれているとのことであるが、発行者として書かれたものなのか、銀を納める対象として書かれているのか、よくわからない。これを解明するためには、当時の納税システムを明らかにする必要があるだろう。

(鈴木) 以上の議論を踏まえると、中国の貨幣史というのは、時代別、地域別にそれぞれ大きく異なっていることがわかった。以前、中国経済史研究の大家である斯波義信先生が「中国を一枚岩で考えてはならない」と言っていたのが実感できる。

(櫻木) こうした中国貨幣史研究の現状を踏まえ、私としては、対象地域を山東省に限定して、出土銭貨に関する研究を行う予定である。

(鈴木) 将来、櫻木先生が中国に調査旅行にでかけるのであれば、ぜひ承安寶貨の実物を見て、その様子を本研究会の席で報告してほしい。

以 上